

ハインリッヒ・フォン・クライストの 『聖女ツェツィーリエあるいは音楽の威力』

小 粥 良

I. 聖女の名が意味するもの

クライストの短編には常に謎めいたところがあって、読了後、読者は何か隠されたまま残っているものがあるという感覚を抱かずにはいられない。何か、納得がいかないのだ。とはいえ、表面的には、一応筋が通った話のように仕立てられていて、深く考えずに読み流してしまえば、とりあえず、辻褃の合った話として読めてしまう。『聖女ツェツィーリエあるいは音楽の威力』の場合も、一種の奇跡物語として読むことが一見可能に思われ、まさに聖譚そのものではないかと早合点しそうになる。確かに、この短編の表題の下には、括弧に括られて、「一つの聖譚」と書き添えられてはいるのだが、しかし、これをそのまま額面通りに受け取ってしまったのは、この物語の特異性を見誤ることとなるだろう。

聖譚としての聖女ツェツィーリエの物語なら、13世紀にヤコブス・デ・ウォラギネが書き記した『黄金伝説』の中に見られるが、その内容はクライストの短編とはおよそ関係が無い。だが、ここで注目しておきたいのは、冒頭でヤコブス・デ・ウォラギネが考察している聖女の名の由来である。リヒャルト・ベンツのドイツ語訳で見てみよう。(下に和訳を付す。)

Caecilia ist soviel wie coeli lilia, Himmelslilie; oder caecis via, ein Weg den Blinden; oder es kommt von coelum, Himmel lya, die wirkende. Oder es heißt caecitate carens, die der Blindheit mangelt. Oder es kommt von coelum, Himmel und leos, Volk. Sie war eine Himmelslilie durch ihre jungfräuliche Schamhaftigkeit; oder sie war Lilie genannt, weil sie an sich hatte die weiße Farbe der Reinheit, den Glanz guten Gewissens, und den Duft guten Rufes. Sie war ein Weg den Blinden, durch ihr gutes Beispiel; ein Himmel in beständiger Beschauung; sie war lya genannt, da sie gute Werke wirkte ohn Unterlaß. Oder sie ward ein Himmel genannt, dieweil, als Isidorus schreibt, die Philosophen haben gesagt, daß der Himmel sei beweglich, rund und feurig. Denn sie war beweglich durch ihr immerwährendes Tun, rund in unverzagtem Ausharren, und feurig

von himmlischer Liebe entzündet. Aller Blindheit mangelnd war sie durch das scheinende Licht ihrer Weisheit. Sie war ein Himmel des Volks, weil das Volk an ihr als an einem geistlichen Himmel Sonne, Mond und Sterne erschaute zu einer Nachahmung, das ist: durchleuchtende Weisheit, Großherzigkeit im Glauben, und die Mannigfaltigkeit der Tugenden.¹

〔Caecilia は「天の百合」というほどの意味であるか、あるいは、caecis via、すなわち「盲人への道」、あるいは、coelum「天」と Iya「作用する女」に由来する。あるいは、caecitate carens「盲目性を欠いた女」を意味する。あるいは、coelum「天」と leos「民」に由来する。彼女は処女の慎ましやかさのゆえに天の百合であった。あるいは、彼女が純潔の白い色、曇りなき良心の光輝、芳しい名声の香気を身に帯びていたゆえに、百合と名づけられた。彼女は、そのよい手本のゆえに盲人への道であり、絶え間ない観照において天であった。彼女は、絶えず善行を働いたので Iya と呼ばれていた。あるいは、イシドルスが書いている通り、哲学者たちが天は敏捷で、丸く、燃えていると言ったゆえに、彼女は天と呼ばれた。なぜならば、彼女は彼女の絶え間ない行いによって敏捷なものであり、怯むことなき堅忍不拔によって丸く（完全であり）、天上の愛に激しく燃えていたのだから。彼女は彼女の知恵の輝く光によって、いかなる盲目性をも欠いていた。彼女は民の天であった。なぜなら、民は彼女の中に、靈妙なる天におけると同様に、太陽、月、星々を、すなわち、(太陽のような)輝きわたる知恵、(月のような)信仰による寛容、(星々のような)徳の多様さを看取り、倣うべき手本となしたからである。〕

このように、『黄金伝説』の聖女ツェツィーリエの項は、聖女の名前の由来についての考察から始まるのであるが、この箇所の特徴的なこととして、「あるいは」が多用されていることが指摘できるだろう。彼女の名前はさまざまに解釈が可能で、それは『黄金伝説』に記録された他の聖人たちの場合と比べても群を抜いている。(他の聖人の場合にも「あるいは」が現れるが、せいぜい一、二度である。)クライストの短編の場合には、聖女ツェツィーリエは「あるいは音楽の威力」と言い換えられているが、『黄金伝説』の物語にはツェツィーリエと音楽の結びつきへの言及が無い。この聖女が音楽に結びつけられるようになったのは後代のことで、『Catholic Encyclopedia』(1908)の「St. Cecilia」の項によれば、彼女を表した聖画にオルガンが登場するのは14-15世紀以降であり、それはおそらく、ラテン語で書かれた古い殉教伝に基づく賛歌の中の「cantantibus organis illa in corde suo soli domino decantabat (彼女は楽器の演奏に合わせ、心の中で主のみ賛歌を歌った)」という一節にある「organis」を、「楽器の演奏に合わせ」とすべきところを「オルガンを弾きながら」と誤解してしまったことに起

因するという。²この一節は、『黄金伝説』にもそのままの形で用いられているが、物語の文脈から考えても、聖女の結婚式で楽隊が演奏していたと解するのが当然であり、それを聞きながら聖女は心の中で歌ったのである。³以後、聖女ツェツィーリエはしばしばオルガンを手に持っているか、オルガンを演奏している姿で描かれることとなり、音楽および音楽家の守護聖人とされるに至った。(ちなみに、ヤコブス・デ・ウォラギネの文章は、チョーサーの『カンタベリー物語』の「第二の尼僧の物語」に、英訳と言ってよいほどほぼ完全に写し取られているが、そこでも「オルガンが旋律を奏でる間に」となっている。⁴

しかし、なぜ、クライストは殊更にこの聖女を選んだのか。音楽の演奏が重要な鍵を握る物語であるとはいえ、単に奇跡物語であれば、他の聖人でもよかつたはずである。確かに、友人アードム・ミュラーの娘の洗礼式へのお祝いとして書かれ、その娘の洗礼名の一つがツェツィーリエであったという、ごく一般的な事情もそこには働いていたであろう。⁵だが、筆者には、ヤコブス・デ・ウォラギネが述べている聖女の名のさまざまな解釈可能性の中に、(聖女自身は一向に姿を現しもせぬこの物語における)この聖女の位置づけが潜んでいるような気がしてならない。友人の娘の洗礼式のお祝いに物語を書こうとしたクライストが、その娘の洗礼名となる(つまり守護聖人となる)聖女について調べ始めたところ、その名の由来に遭遇し、そこから着想を得てこの物語が生まれたのではないか。

筆者が目にするのは聖女の名と「盲目性」との関連である。元来、ツェツィーリエという名は、「caecus (盲目の)」というラテン語に由来するローマの氏族(ゲンス)名 Caecilius から派生したものである。それゆえ、ヤコブス・デ・ウォラギネも(それに倣ったチョーサーも)「盲人への道」だとか「盲目性を欠いた女」だとかいった解釈をしている。また、彼女の名は「天」を意味する「coelum」ないし「caelum」との連想を喚起する。彼女は天と地を繋ぐ存在であり、天そのものとされる(「彼女は、そのよい手本のゆえに盲人への道であり、絶え間ない観照において天であった。」)。「lilia (百合)」との連想も、この聖譚を読めば、天上の不可視の百合(と薔薇)の花冠が天使によってもたらされ、信仰を得たものの目が開け、その花冠と天使が見えるようになるという挿話に関係づけられていることがわかる。彼女は、見えない世界を見るものであり、それゆえに天そのものと思われるのだ。彼女は天上の真理を体現しており、天上の知恵の光で満たされていて、その真理の輝きは、凡夫にはあたかも天体の輝きと感じられる(「彼女は彼女の知恵の輝く光によって、いかなる盲目性をも欠いていた。彼女は民の天であった。なぜなら、民は彼女の中に、靈妙なる天におけると同様に、太陽、月、星々…」。)。盲人が光無き世界に生きているように、魂の目が開けていない凡夫も暗闇の中にいる。しかし、聖女ツェツィーリエは完璧な真理の光輝を放つ存在であり、「盲目性を欠いて」いるのだ。

クライストのこの短編においては、聖女ツェツィーリエの名が指し示すものの方が、実は音楽よりも重要な意味をもっているのかもしれない。それは真理の開示の可能性を指示している。しかしながら、真理の開示が聖女の奇跡によってなされると信じるには、クライストはあまりにも近代人でありすぎたのではないだろうか。

Ⅱ. 聖女ツェツィーリエなのか、それとも音楽の威力なのか？

問題は、表題中の「あるいは」である。クライストの短編の表題も、『黄金伝説』の「あるいは」のように、単にこの聖女の別名の提示と受け止めてよいのだろうか。この点については、すでに多くの研究者が、この「oder」を選言的に解釈すべきだと指摘している。「あるいは」と言い換えているのではなく、「それとも」、「はたまた」という風に、どちらか一方であるということを示唆しているというのだ。ならば、最後に疑問符でもつけてくれた方がわかりやすかろうというものだが、そんなにわかりやすくしてくれないところが、いかにもクライストらしい。こういうところにこそ、核心が隠されているのではないか。だが、結局のところ、テキストをよく吟味してみなければ、それは見えてこないだろう。したがって、まずは、物語の概略を冒頭から辿りつつ、注目すべき点を指摘していきたい。

Um das Ende des sechzehnten Jahrhunderts, als die Bilderstürmerei in den Niederlanden wüthete, trafen drei Brüder, junge in Wittenberg studierende Leute, mit einem vierten, der in Antwerpen als Prädicant angestellt war, in der Stadt Aachen zusammen.

[16世紀の末、偶像破壊がネーデルラントで猛威を振るっていた頃、ヴィッテンベルク大学の若き学徒であった3人の兄弟たちが、アントワープで改革派教会の牧師の職に就いていた4人目の兄弟とアーヘン市で落ち合った。] (SWB II, 221)

16世紀の末頃のアーヘンが舞台である。16世紀の末という漠然とした言い方では判然としないが、アーヘンの当局はカトリックでありながらプロテスタントに同情的という具合に描かれているので、おそらく、プロテスタントが市議会を掌握していた時期ではなく、プロテスタントに宥和的姿勢を示したカトリックの市長の在任期が想定されているのであろう。アーヘンでは、1530年頃からネーデルラント方面からの改革派系のプロテスタントの移民の流入と定着が見られ、やがてこの帝国都市の市議会を掌握するほどの大きな勢力になっていくが、カトリック教会の守護者を自任する皇帝の介入もあり、カトリックとプロテスタント両陣営の覇権争いは熾烈を極めた。両勢力は拮抗し、あるときはプロテスタント陣営

が優勢となり、あるときはカトリック陣営が優勢となるという具合に、市の支配権は両者の間で揺れ動いた。この事態は、16世紀後半、二度にわたる皇帝軍による市の占領という事態を招き（1581年、1598年）、最終的には、1614年のスペイン軍による包囲によってプロテスタント勢力が敗北し、1616年には多くのプロテスタント市民が追放されることとなった。これ以降、18世紀末のフランス軍による占領に至るまで、アーヘンでは信教の自由が抑圧され、カトリック勢力の支配が確固たるものとなった。⁶

宗教的争乱期のアーヘンでは、特徴的なことに、プロテスタントと言ってもネーデルラント方面から移住してきた改革派が主流で、ルター派の人々からも煙たがられていたようである。クライストの短編でも、兄弟たちはネーデルラント（母親がデン・ハーグに住んでいるのでおそらくオランダ）の出身で、4人目の兄弟は改革派教会の牧師（Prädicant）として「雇われて（angestellt）」いる（SWB II, 221）。⁷すでに職に就いている彼がおそらく年長で、他の3人が弟であろうが、彼らがヴィッテンベルクで何を学んでいたのかは書かれていない。しかし、マルティン・ルターが95か条の提題をヴィッテンベルク城教会の扉に貼り付けたことが宗教改革の発端となったのであり、ルターも教鞭を取ったヴィッテンベルク大学は宗教改革の牙城であった。3人はおそらく、兄と同じく牧師になるべく神学部で学んでいたのではないかと推測できる。

兄弟たちは、突然舞い込んできた伯父からの財産相続の知らせのゆえにこの地にやってきたのだが、兄弟たちのうち誰もこの伯父のことは「知らなかった（unbekannt）」（SWB II, 221）。つまり、会ったことも聞いたこともなかったということだろう。さらに不思議なことに、向かった先には、この件について問い合わせようにも、それに応じることのできる者が誰もいなかった。この時点で、すでに、なにか怪談じみている。兄弟たちは、仕方なく宿に滞在し、数日間が過ぎるが、その間に牧師が物語るオランダでの偶像破壊の諸事例に耳を傾ける。その頃たまたまアーヘン市の門の前にある聖ツェツィーリエ女子修道院では聖体祭（ちなみに『チリの地震』でもやはりこの祝日に、聖堂の階段での見習い修道女の出産というスキャンダラスな事件が起きる）の祝典が厳かに執り行われる予定になっていたが、これを知った兄弟たちは、「熱狂と青春とネーデルラント人の例に掻き立てられて（von Schwärmerei, Jugend und dem Beispiel der Niederländer erhitzt）」（SWB II, 221）修道院を襲撃し、偶像破壊を執行することを企てる。作品本文の表現では、「アーヘン市にも偶像破壊という見世物を見せてやることにした（beschlossen, auch der Stadt Aachen das Schauspiel einer Bilderstürmerei zu geben）」（SWB II, 221）とあり、派手な行為によって世間の耳目を集めることこそが真の目的であると感じられる。兄弟たちの動機はこのように始めから不純で、信仰心から発しているというよりも、若気の至り、

血気盛んから生じた愚行と思われ、たんに無聊を慰めるための軽薄な行為に過ぎないと言ってよい。その本質は偶像破壊というよりは、ヴァンダリズムでしかない。そして、このような兄弟たちの周りに、同じように軽薄な若者たちが集まって来る。⁸若者たちは兄弟たちと共に、宿屋で毎晩飲み食いしながら襲撃の計画を練る。そして、その当日がやってくるのだが、修道院内では困った事態が生じていた。この日、祝祭の中で修道女たちが歌うことになっていた古いミサ曲を指揮するはずのシスター・アントーニアが、重病で僧房に臥せていたのである。修道院長は、とにかく何でもいいから間に合わせて歌うようにと命じるが、修道女たちは困惑している。そうこうするうちにも、ミサが始まり、暴徒の一団はすでに聖堂内に結集してきていて、非常に緊迫した状況になっている。修道院では、この日の襲撃について事前に情報を得ていたのだが、市当局に助けを求めても、内心プロテスタントに共感している市当局が返事をはぐらかして動いてくれなかったので、自衛するほかなかった。こうした緊張の最中、修道女の合唱隊がいる棧敷席では、シスター・アントーニアの指揮無しに合唱を始めようとしていたが、まさにその瞬間、シスター・アントーニアが「澁刺と健康な様子で、少し青ざめた顔をして (frisch und gesund, ein wenig bleich im Gesicht)」(SWB II, 223) 楽譜を小脇に抱えて登場し、オルガンアトリビュートに向かうのである。(見落としそうになるが、オルガンは聖女ツェツィーリエの持物であることをここで想起されたい。) 素晴らしいミサ曲の演奏に接して会場は静まりかえり、結局騒動は何も起こらず、修道院は救われる。ここまでが前段である。

クライストの他の多くの短編と同様、この短編の場合も二つの部分に分けることが可能で、前段の過去の出来事についての報告部分が、後段の物語の前提となっており、二つの部分の語りスタイルは明白に異なっている。前段では、語り手は、過去の出来事を、語り手の観点から眺め、整理し、報告として提示しているが、その語り口は伝奇小説のそれに近い。あるいは、当時の新聞記事の書き方に近いと言えるかもしれない。しかし、後段で語られる後日談においては、語り手は、兄弟たちの母親の視点に寄り添いながら、その限定された視野から事件の真相にアプローチしようとしているかのようだ。

この事件から6年が経過し、兄弟たちの母親が息子たちの消息を求めてデン・ハーグからアーヘンにやって来る。あちこちで問い合わせるうちに、施設に収容されている4人のことではないかという話を聞かすが、当初は、ありえないことと思う。だが、気になって、施設を訪れてみると、信じがたいことに、そこにいるのはまさに自分の息子たちだった。そして、このような事態に立ち至った原因を探ろうと、兄弟たちと共に修道院襲撃計画に加わっていた織物商人(典型的な改革派の職業⁹)のファイト・ゴットヘルフ氏を訪ね、彼の報告を聞く。

ゴットヘルフ氏の話で、聖体祭の日に聖堂で何が起きたのかが明らかにされる。

まさに、牧師によって襲撃の合図がなされようというその時に、ミサ曲の演奏が始まり、兄弟たちはこの瞬間に発狂した。兄弟たちはみな石と化したかのようにその場に立ちすくみ、やがてその場に平伏してしまった。ミサが終わり、会衆が立ち去った後でも、兄弟たちは床に平伏したままで梃子でも動こうとしないのを、何人がかりかで無理やり聖堂から運び出し、宿屋へと連れ帰ったが、宿屋でも兄弟たちの奇怪な行動はやまず、キリスト磔刑像をテーブルの上に置き、それに向かって跪いて礼拝し続けた。真夜中になると、突然立ち上がり、Gloria in excelsis をぞっとするような大音声で歌い始めた。奇しくも、それは兄弟たちが発狂した瞬間に演奏されていたミサ曲中のまさにその曲であった。この行為は毎夜、定期的に繰り返された。兄弟たちは保護施設に入れられるが、そこでもその状態はずっと続いた。この事情が前段では描かれずに、飽くまでゴットヘルフ氏の報告という形で、後段に置かれていることは注目してよいだろう。一種の「探偵」のような役割を担わされた母親が、過去の「真相」を発見していく過程の中に位置付けられているのだが、ゴットヘルフ氏が真実を証言しているという保証はどこにもない。¹⁰

さらに事件が起きた現場を確認するために ([...] in der wehmüthigen Absicht, auf einem Spaziergang, [...] den entsetzlichen Schauplatz in Augenschein zu nehmen auf welchem Gott ihre Söhne wie durch unsichtbare Blitze zu Grunde gerichtet hatte [...] [...]) 散歩の途中で、[...] 神が彼女の息子たちをあたかも不可視の稲妻をもってするかのように打ちのめした恐ろしい舞台を一目見てみようという憂鬱な意図をもって [...] [SWB II, 230]) 当の修道院を訪れるのであるが、修道院では、幸運にも修道院長と面談する機会を得る。しかし、結局、彼女が見出すのはやはり修道院長の語る証言でしかなく、ファイト氏の証言と同様、証言者の観点から都合よく整理され、解釈された主観的物語であり、場合によっては、虚偽、脚色、隠蔽を含んだものですらありうる。確かに、修道院長は、あの祝典の間中ずっとシスター・アントーニアが意識を失った状態で床に臥せていたこと、それは彼女の看病をしていた修道女が証言できること、誰があのみサ曲を指揮したのか誰にもわからないことなどを非常に雄弁に語るが、これらの話が真実であるという保証は無い。

母親には探偵の荷は重すぎ、ファイト氏や修道院長の証言を注意深く分析するような批評力が欠けている。むしろ、彼らの言葉をそのまま信じ、特に、威厳に満ちた修道院長の確信をもった語り口に圧倒され、聖女ツェツィーリエの起こした奇跡に違いないという彼女の解釈を受け入れ、デン・ハーグに戻った後、カトリックに改宗(キリスト教内部の他宗派からなので厳密には帰正)してしまう。¹¹いわば、ミイラ取りがミイラになってしまうのである。

以上、多少解説を加えながら、ざっと話の粗筋を見たが、この物語を表面的に

だけ読んでみると、一種の怪談話のような、超常現象を扱ったものに見える。しかし、細かく見ていくと、それを裏切るような事柄も色々と書き込まれていることに気づく。たとえば、ファイト・ゴットヘルフ氏だが、彼はこの事件に関与していたことを知られるのを極度に恐れていて、決して他言しないようにと何度も念を押す。おそらく、この6年の間に、アーヘンの宗教勢力の均衡は大きく変化していたので、修道院襲撃計画に加わったなどということが明るみに出ると、彼の立場が非常に不都合なことになるのだろう。そのような人物が真実を語るであろうか。語るにしても、隠蔽なしに語るであろうか。また、修道院長にしても、その堂々と威厳に満ちた風采が強調されており、組織の長としての政治的手腕を持った人物であることは間違いない。¹²修道院を救うために、聖女による奇跡の話を捏造することだってありうるだろう。

兄弟たちは一見したところ聖女による罰を受けて発狂したかのように見えるが、そうでない可能性もあると、Birrell (1989) が指摘している。その説によれば、兄弟たちが発狂したのは聖女の起こした奇跡ではなく、まさに「音楽の威力」によるのであり、何らかの仕方で音が物理的に兄弟たちの身体内の磁気に作用した結果だという。¹³ (これはクライストの時代に流行した動物磁気説に基づく推論であり、兄弟たちの症状が、動物磁気説が主張していた上半身と下半身の磁気の逆転によってもたらされる症状に酷似しているのだという。)

Birrell のような見方をすれば、確かに、この短編の名が示唆するところは、「これは聖女ツェツィーリエが起こした奇跡であるか、あるいは、音楽の威力が起こした症状であるかのどちらかである」という具合に解釈できる。そして Birrell にとって、その答えは明白であり、音楽の (何らかの物理的な) 威力が引き起こした症状の方である。ただ、Birrell 自身が認めている通り、それで何もかもすっきりと解決するわけではなく、たとえば、あの日オルガンを演奏し聖歌隊を指揮したのがいったい誰なのかという問いへの答えは、やはり謎のままである。

Ⅲ. 限定された視界

さて、この稿の冒頭で、聖女の名のさまざまな解釈が (見えない真理の世界に対する) 盲目性と関係することを指摘したのであるが、見ることや視界の限定性に関係づけられた不思議なエピソードがこの短編中にある。ファイト氏の報告を聞いた3日後に母親は女友達に伴われて、修道院に出かけるのであるが、そこで例の聖堂を覗き込む。

(...) fanden die Weiber den Dom, weil eben gebaut wurde, am Eingang durch Planken versperrt, und konnten, wenn sie sich mühsam erhoben, durch die Öffnungen der Bretter hindurch von dem Inneren nichts, als die

prächtigt funkelnde Rose im Hintergrund der Kirche wahrnehmen. Viele hundert Arbeiter, welche fröhliche Lieder sangen, waren auf schlanken, vielfach verschlungenen Gerüsten beschäftigt, die Thürme noch um ein gutes Drittel zu erhöhen, und die Dächer und Zinnen derselben, welche bis jetzt nur mit Schiefer bedeckt gewesen waren, mit starkem, hellen, im Strahl der Sonne glänzigen Kupfer zu belegen. Dabei stand ein Gewitter, dunkelschwarz, mit vergoldeten Rändern, im Hintergrunde des Baus; dasselbe hatte schon über die Gegend von Aachen ausgedonnert, und nachdem es noch einige kraftlose Blitze, gegen die Richtung, wo der Dom stand, geschleudert hatte, sank es, zu Dünsten aufgelöst, misvergnügt murmelnd in Osten herab. (SWB II, 230)

[(…) 女たちは、聖堂がちょうど改修中だったので、入り口が板で塞がれているのがわかった。そして、苦勞して背伸びしてみても、板の隙間を通して識別できたのは、教会の奥に華麗に輝く薔薇窓だけだった。陽気に歌を歌っている数百人の労働者たちが、複雑に入り組んだ細板の足場の上で、塔をたっぷり三分の一ほど高くしようと、また、これまでただスレートで覆われていただけの塔の屋根と小尖塔を丈夫でびかびかの、太陽の光線に輝きわたる輝く銅で葺こうと、忙しく働いていた。同時に、縁を金色に輝かせた嵐の黒雲が、建物の背後にあった。この嵐は、すでにアーヘン辺りの上空を雷の大音響を発しながら通り過ぎていたが、聖堂が立っている方に向けてなお幾つかの弱い稲妻を投げかけた後で、切れ切れになりつつ、不満気につぶやきながら、東の方に沈んでいった。]

ふと、筋の流れとは関係なく、小休止のように置かれたかのように見えるこの挿話が、しかしながら、読後に強い印象を残す。それは、その不可解さゆえということもあるが、ここに何か事柄の核心に関わるようなことが示唆されているように感じられるからでもある。そして、この建物の背後には、遠い彼方に、嵐の黒い雲が、稲光を発しながら遠ざかっていくのが見える。このように、内部と外部が重なって二重に眺められている。なぜこのようなエピソードがここに挿入されているのか、まったく謎のように思われる箇所であるが、Birrell の説を正しいと仮定して読めば、意味づけが可能ではないか。聖堂は身体の隠喩で、外光を取り入れている薔薇窓は、身体内部への外部からの影響を示唆するものと考えられる。もしそうであるとすると、陽気に歌いながら働いている数百人もの職人たちの姿は何を意味するのか。それは、おそらく、身体の内部で休みなく働き続けるさまざまな仕組みや反応であろう。錯綜して張り巡らされた足場の板組みは、さしずめ神経組織といったところか。また、遠景に遠ざかっていく嵐の黒雲の中

に光る稲妻への言及も非常に特徴的であるが、稲妻はクライストの詩や逸話にたびたび登場し、特別な意味を持つモチーフであり、人間の認識の限界の彼方から突然に介入してくる何ものかである。しかし、それはまた、人間の身体内の磁気に影響を及ぼす「電気の力」を意味してもいよう。つまり、この去りゆく嵐の描写は、兄弟たちに降りかかった不運の原因が自然界にあることを示唆している。もし、そのように読むことが妥当だとすれば、この短編には何ら超自然的なところはなく、神や聖人の起こす奇跡について語ってはならず、むしろ、もっぱら自然について語っているということになる。ただ、その自然は、人間の認識能力が限界づけられているがゆえに神秘であり、その作用は、あたかも超越者の顕現のように感じられるのである。

もしかしたら、兄弟たちの発狂に音楽はまったく関与しておらず、電気と磁気の作用だけが謎の答えである可能性すらある。音楽が始まった瞬間にそれが起こしたのは、まったくの偶然だったのかもしれないからである。シスター・アントニアの（幽体離脱の？）話は、修道院長の嘘ということで済むかもしれない。¹⁴

ただ、自然現象による作用であるとする、なぜ兄弟たちだけが発狂するのは、やはり説明しがたく思われる。¹⁵だが、これについては、遺伝的体質によって説明できるのかもしれない。¹⁶

そのように考えてみると、聖体祭の日にこの事件が起きたことは、非常に象徴的だ。カトリックとプロテスタントを分かち最も重要な違いは聖餐（カトリックでは聖体の秘跡）の理解にあり、プロテスタントでは聖変化という考えを取らない。宗教改革は、中世カトリシズムの魔術的思考から近代社会の世俗性への移行にとって、やはり重要な第一歩だった。聖女の奇跡で救われたかのように思われた修道院であったが、「それにもかかわらず」（SWB II, 224）やがて解散させられ、消滅してしまう運命にあった。

[...] und das Kloster noch bis an den Schluß des dreißigjährigen Krieges bestanden hat, wo man es, vermöge eines Artikels im westphälischen Frieden, gleichwohl säkularisirte.

〔(…)そして、修道院は30年戦争の終結までなお存続したのであるが、それにもかかわらず、その頃には、ウェストファリアの和議のある条項によって解散させられたのであった。〕(SWB II, 224)

「解散させられた」と訳してみた箇所は、原語では「man [...] säkularisirte」(Reuß&Staengleの校訂によるミュンヘン版を参照しているので、綴りはオリジナルのまま)である。「säkularisieren」という動詞は、ここでは本来の「教会や修道院の財産を国家が接収して国有化する」という意味で用いられている。しかし、この語の

派生語「Säkularisierung」は、やがて「世俗化」すなわち、宗教が弱体化していき、一般的に社会や政治から切り離されていく近代の傾向を意味するようになった。¹⁷ 今日では、元来の意味での名詞形には「Säkularisation」が用いられ、「世俗化」という意味では「Säkularisierung」を用いるという具合に区別されているが、かつてはそうした区別は無かったようである。動詞「säkularisieren」は、「世紀」を意味するラテン語「saeculum」に由来し、「永遠の存在から時間的な存在への移行」を意味していた。30年戦争後のミュンスターにおけるウェストファリア条約の交渉に際して、フランス使節ロングヴィル公アンリ2世が1646年5月8日に「séculariser」という動詞形で用いた例が初出であるとされた。(もっとも今日では、それよりさらに以前のラテン語での用例が見つかっており、この説は誤りであることが証明されている。) クライストがこの動詞を元来の意味(つまり教会財産の接収および国有化)で用いているのは明らかであるが、前段の終結部に置かれたこの語は何か意味ありげに見える。たとえ、クライストが後代にマックス・ウェーバー等が使用したような意味での「世俗化」という用語を知っていたわけではないにしても、啓蒙期にルソーやカントが「道徳の世俗化」を行ったことは今日よく知られていることであるし、「国家と宗教の分離」という「世俗化」テーゼはクライストの同時代人と言ってよいヘーゲルに明瞭に現れている。ここで、クライストが示唆しようとしていることも、大筋で「世俗化」の方向を指し示していると言ってよいだろう。また、クライストの念頭には、おそらく、19世紀初頭のナポレオン支配下でのライン左岸、および右岸における「世俗傾化(Säkularisation)」が念頭にあったかもしれない。いずれにせよ、修道院解散への言及によって、たとえ聖女の奇跡が起きたのだとしても、それは永遠に効力をもつものではなかったということが示唆されている。

Reinhold Steig (1901) は、『聖女ツェツィーリエあるいは音楽の威力』は『ベルリント刊紙』に掲載されたクライストの作品中、カトリック的傾向において書かれたかのようにみえる唯一の作品¹⁸としている。しかし、これは聖女の奇跡どころか、究極的には世俗化(Säkularisierung)についての物語かもしれず、クライストのヴィジョンの中では、世俗化の行きつく果てにこそ、輝く啓蒙の光で真理が隈なく照らし出される未来が想定されているのかもしれない。しかし婚約者ヴィルヘルミーネ・ツェンゲへの書簡の中で、「緑色のガラス」¹⁹を通して世界を眺めるという比喻で、カント哲学への根本的な懐疑を説明しようとしたクライストの場合、それは飽くまでも実現不可能な夢のヴィジョンに留まる。真理である「物自体」は直接認識不可能で、間接的に表象としてしか認識しえないのだとすれば、そもそも人間の感覚を通して正しい表象を得られるという保証などここにも無いのだから、²⁰ (聖女の名が示していたように「天」そのもののような真理を完全に見ることを欲するならば) 必然的に絶望に陥るほかはない。という

のも、そのような考えには論理の飛躍があり、愛の神により調和へと予定された世界秩序が暗黙の裡に前提となっているので、それ自体、すでに一種の信仰であるからだ。²¹

したがって、これは世俗化を手放しで礼賛するような話でもない。「幽霊の正体見たり枯れ尾花」という落ちで済むような、わかりやすい話では決してない。なぜなら、カントによって提示された啓蒙という近代のプログラムに対してクライストは根本的な懐疑を抱いており、その問題の構造を作品化しているのではないかと考えられるからだ。そして、「偶像破壊」という「近代化」、「世俗化」に深くかかわる問題を取り上げている『聖女ツェツィーリエあるいは音楽の威力』は、小品ながら、実はなかなか手ごわい作品であると言うほかはない。

註

本稿中の和訳はすべて筆者による私訳である。なお、『聖女ツェツィーリエあるいは音楽の威力』の引用は、Heinrich von Kleist. Die heilige Cäcilie oder die Gewalt der Musik (Eine Legende). *Sämtliche Werke und Briefe. Band II*. Carl Hanser Verlag, München 2010, S. 221-233に依拠した。本文中、この作品からの引用の場合は、和訳の後の括弧内に SWB II と記し、引用ページを示す。

- 1 Jacobus de Voragine, *Die Legenda aurea*, übersetzt von Richard Benz, Heidelberg, 1984, S. 895-6.
- 2 Johann Peter Kirsch, "St. Cecilia", *The Catholic Encyclopedia*, Vol. 3, New York, 1908, p. 473.
- 3 Jacobus de Voragine, *Legenda aurea: vulgo historia lombardica dicta*, hrsg. Johann Georg Theodor Grässe, Leipzig 1801, S. 771-2
- 4 Geoffrey Chaucer. *The Canterbury Tales*, translated into modern English by Nevill Coghill, London 2003, p. 437.
- 5 Walter Hinderer, Die heilige Cäcilie oder die Gewalt der Musik, in *Kleists Erzählungen. Interpretationen*, hrsg. Walter Hinderer., Stuttgart 1998, S. 181; Klaus Müller-Salget, *Heinrich von Kleist*, Stuttgart 2002, S. 287.
- 6 この段落の記述は、ドイツ語版 Wikipedia の「Aachener Religionsunruhen」の項目を参照している。http://de.wikipedia.org/wiki/Aachener_Religionsunruhen 2012年11月13日アクセス。
- 7 オランダ語で「predicant」は改革派教会の牧師を意味している。
- 8 眞鍋正紀『クライスト、認識の疑似性に抗して—その執筆手法—』鳥影社、2012年、115-6頁参照。眞鍋は、牧師が潜在的に存在する「不満分子」を利用して、意図的に群衆を発生させようとしていると指摘している。
- 9 „Rheinische Industriekultur“というウェブサイトに掲載された Walter Buschmann による „Textilindustrie in Aachen“という記事には、以下のように記述されている。
„Nachdem sich schon im 15. Jh. gewerbetüchtige Protestanten aus den Niederlanden in Aachen angesiedelt hatten und später Religionsflüchtlinge aus Burgund, Flandern und Artois dazukamen, wurden die Auseinandersetzungen zwischen den Religionen 1614 in Aachen zugunsten der Katholiken entschieden. Mit der daran sich anschließenden

Vertreibung der Protestanten verließen die tüchtigsten, reichsten und unternehmensten Tuchhändler die Stadt und siedelten sich in den Orten und Städten der Region an, in denen dadurch die Tuchindustrie begründet oder entscheidend entwickelt wurde.“〔すでに15世紀にはネーデルラント地方出身の勤勉なプロテスタントたちがアーヘンに定住していたし、後には、ブルグント地方、フランドル地方、アルトワ地方から宗教上の理由による難民らがそれに加わったのだが、1614年には、宗派間の対立はカトリック側の勝利により決着を見た。それに引き続いて生じたプロテスタントの追放によって、最も有能で、富裕で、企業心に富んだ布商人らがこの都市を去り、この地方の村々や諸都市に定住したが、これによってそれらの土地では織物産業が創始されたり、あるいは決定的な発展を遂げたりすることとなった。〕

(<http://www.rheinische-industriekultur.de/objekte/aachen/Textil/textil.html> アクセス2012年11月14日)

10 Gordon Birrell, Kleist's "St. Cecilia" and the Power of Electricity, *The German Quarterly*, Vol. 62, No. 1, (Winter, 1989), p. 73; Müller-Salget, a. a. O., S. 288.

11 Birrell, *ibid.*, p. 73:

“Die heilige Cäcilie,” like other Kleist narratives, has frequently been regarded as a prototype of the modern detective story. In this case it is the mother who assumes the role of detective, though she serves primarily as an *abschreckendes Beispiel* of the detective who herself becomes the next victim; as Haase and Freudenburg have noted, the mother’s way of coming to terms with her sons’ fate is in some sense to reenact it.”〔『聖女ツェツィーリエ』は、クライストの他の物語と同じように、しばしば、近代探偵小説の原型と見なされてきた。この場合、探偵の役を担うのは母親である。たとえ、彼女が何よりもまず、自分自身が次の犠牲者となる探偵という「見せしめの例」として機能しているにせよ。ハーゼやフロイデンプルクが述べているように、母親が息子たちの運命と折り合いをつけていく仕方は、ある意味では、その運命の再演になっている。〕

12 cf.) Birrell, *ibid.*, p. 74.

13 Birrell, *ibid.*, pp. 77–81.

14 Birrell, *ibid.*, p.72:

“Until fairly recently, Kleist critics tended to follow the mother’s example in taking the various explanations at face value. In the apparent absence of contradictory evidence, the final clarification that the Abbess gave the mother seemed convincing enough: St. Cecilia herself appeared in the nick of time to direct the mass, while the godless, arrogant brothers received the divine (and at the same time very Kleistian) sentence of being reduced to mindless marionettes. Later critical studies, however, have persuasively questioned the credibility not only of the Abbess, but of all of the other commentators in the story, including the narrator himself. Even a moderately close reading reveals that the various interpretations offered to the mother are internally contradictory, emotionally tainted, and in most cases patently self-serving.”〔かなり最近まで、クライストの批評家たちは、さまざまな説明を額面通りに受け取るという点において、母親の例に従う傾向があった。矛盾する証拠が一見無いように見えるので、修道院長が母親に与える最終的な説明は、十分説得力があるものに思われた。すなわち、聖ツェツィーリエ自身があわやという時に現れてミサを指揮する間に、邪悪で傲慢な兄弟たちは神の（同時に非常にクライスト的な）審判を受けて、精神の無いマリオンネットになり下がった、というのである。しかし、もっと最近の批評的研究は、修道院長ばかりか、語り手自身を含む物語に登場する他のすべての発言者の信憑性を説得力ある仕方疑問に付す。ほどほどに詳しい読解ですら、母親に与えられるさまざまな解釈が内部矛盾をきたして、感情に汚染されていて、ほとんどの場合明らかに利己的であることを露わにする。〕

- 15 Müller-Salget, a. a. O., S. 291:
 „Warum wirkt sie so selektiv, schlägt nur die vier Rädelsführer völlig in ihren Bann?“〔なにゆえそれ(音楽の威力)はあれほど選択的に作用して、4人の首謀者のみを完全に虜にするのか。〕
- 16 cf.) Birrell, op. cit., p. 79:
 “Whereas the members of the congregation and the other would-be iconoclasts are sturdy and well-balanced enough to withstand the onslaught of the music with nothing more than a momentary trance, the brothers succumb completely.”〔礼拝に集った人々や、偶像破壊に加わるはずだった他の者たちが、十分に頑健でバランスが取れていたために、ほんの瞬間的なトランスに陥っただけで、音楽の猛攻撃に持ち堪えた一方で、兄弟たちは完全に屈してしまう。〕
- 17 C. Wright Mills は世俗化について次のように要約している。
 “Once the world was filled with the sacred — in thought, practice, and institutional form. After the Reformation and the Renaissance, the forces of modernization swept across the globe and secularization, a corollary historical process, loosened the dominance of the sacred. In due course, the sacred shall disappear altogether except, possibly, in the private realm.”〔かつて世界は聖なるもので満ちていた—思想においても、実践においても、制度的形式においても。宗教改革とルネッサンスの後には、近代化の諸力が地球を席卷し、近代化から帰結する歴史のプロセスである世俗化が、聖なるものの支配を緩めた。やがて、聖なるものは、たぶん私的領域を除けば、完全に姿を消してしまうだろう。〕 C. Wight Mills, *The Sociological Imagination*, Oxford: Oxford University Press, 1959, p. 32.
- 18 Reinhold Steig, *Heinrich von Kleist's Berliner Kämpfe* (Berlin, Stuttgart: Spemann 1901), S. 531.
- 19 眞鍋、前掲書、27-30頁参照。「緑色のガラス」については、ヴィルヘルミーネ・ツェンゲ宛の1801年3月22日付の書簡(SWB II, 712)を参照。
- 20 cf.) Tim Mehigan, “Betwixt a false reason and none at all!”: Kleist, Hume, Kant, and the “Thing in itself”, in: *A companion to the works of Heinrich von Kleist*, ed. by Bernd Fischer, Woodbridge 2003, pp. 165-88.
- 21 眞鍋、前掲書、32-3頁参照。眞鍋は、「擬似的認識」という概念を用いて、クライストが仮象としての間接的な認識方法を必ずしも否定しているのではなく、ヴィルヘルミーネ・ツェンゲに宛てた1800年11月16日の書簡の中で、そのような認識を、太陽に背を向けて眺める虹(つまりその太陽の光の反射から生まれるプリズム)に譬えていることを指摘している(SWB II, 669)。クライストがそのように折り合いをつけようとしていたことは確かだろう。しかし、たとえそのようなアプローチが残されているという思いの方が勝っているように感じられる。知性をもって真理に到達しようとする人間の努力は、シーシュポスの神話やイクシーオンの神話に擬えられる(眞鍋71-4)。真実の発見はあまりに困難で、閉ざされている。そして、たとえ真実が(たとえば『O 侯爵夫人』の場合のように)発見されるにしても、それがただちに幸福な結末に繋がるわけではない。この点を、Tim Mehiganは、クライストの懐疑主義に結びつけて論じている(Mehigan, op. cit., p. 167)。